

教育学の研究対象としての給食 —完食指導から共生の公共的空間に—

香川 七海*

From Mandatory Meal Completion Instruction to a Public Space of Coexistence

Nanami KAGAWA*

【要旨】

本稿では、完食指導を手がかりに、学校教育現場における給食のあり方について考察した。給食の完食への志向性は、貧困対策と栄養改善を起源とするが、現代では残食を減らすことを目的として、時として懲罰的措置を伴うこともある。完食指導は、①「嫌いなものから逃げない」姿勢や、食べ物を粗末にしないなどの立場から肯定され、②残食の責任が児童生徒の「好き嫌い」や「わがまま」に帰属させられる傾向がある。ただ、給食の品質が残食の原因となる可能性もある。また、本稿の末尾では、テレビドラマ『鈴木先生』（テレビ東京、2011）の映像分析を通して、児童生徒に責任を押しつけずに、給食のあり方を考察する思考についても検討した。

キーワード：学校給食、完食指導、会食恐怖症、民主主義（デモクラシー）、公共性

1. 問題設定

本稿は、完食指導を手がかりに、学校教育現場における給食のあり方を考察する試みである。

日本の学校給食は、1889（明治22）年に忠愛小学校（山形県鶴岡市）で貧困対策の一環として児童に提供された食事が起源とされる。その後、1954（昭和29）年に学校給食法が制定され、制度の基礎が確立した。

日本の場合、給食について教育界でしばしば争点になるのが完食指導である。完食指導というのは、文字通り、〈給食を完食させようとする指導〉を意味する言葉であるが、これは厳密な定義を持った教育学用語、あるいは、教育法的に論拠を持った指導法ではない。完食指導は、その目的を遂げるために、

①給食の時間が終わっても教室に児童生徒を残して食事を続けさせる、②残食の多さ、あるいは、完食の達成度を学年・学級・班などの単位で競争をさせて序列をつける、③残食の多い班やグループに連帯責任として懲罰的措置を与えるといった方法が取られることがある⁽¹⁾。

完食指導の起源は判然としないが、戦前においても、教育関係者のなかでは、給食が「児童の食物に對する好き嫌ひの念を一掃」する役割を持ち、「偏食」を自覚させるものとなると理解されていたようである（岩原、1929 p.206）、戦後、学校給食法が施行されたあとも、給食が児童生徒の「栄養となるためには先ず完食させることが先決問題」とされていた（堀、1955 p.14）⁽²⁾。このことから、完食の推奨

* かがわ ななみ 一般財団法人・神奈川県高等学校教育会館教育研究所

自体は給食の歴史のあゆみと不可分の関係にあったと考えられる。

ただし、これは、貧困対策や栄養改善という文脈からの理解である。現在の完食指導とは意図が違う。残食を出さないために、給食の意図（＝児童生徒の栄養摂取の機会を保障する場）を逸脱して完食を徹底する指導は、1960年代末～1980年代にかけて全国的に普及したと考えられる。今日的な文脈での完食指導は、管理教育や給食の米食導入、飽食時代の到来と相俟って、この時期から強化されていったものと推測される⁽³⁾。本論でも紹介するが、現在でも給食を完食するという姿勢については、①精神論・根性論（＝「苦手なものから逃げない」等々）、②集団主義教育（＝完食の達成度を集団内で序列化する等々）の立場から肯定的評価が与えられることがある。これらのロジックは、管理教育が興隆した時代の典型的な教育言説のパターンであり、完食指導は当時の教育観の残滓のひとつであると位置づけることができるかもしれない。

2. 完食指導に対する当事者の回顧

正確な統計が存在しないので、現在のところ、どのような程度の完食指導が、全国各地にどの程度普及しているのかは、わからない。ただ、近年の完食指導に関する新聞報道を踏まえると⁽⁴⁾、昭和時代に限定されず、2000年代に小中学校時代を過ごした若年層にも、懲罰をともなった完食指導を見聞した経験が相当数存在するようである。また、筆者は、2018～2024年にかけて、東京都内の私立大学で給食や完食指導に関する授業を展開してきた。過去の授業では、そのつど、受講生（＝1990年代後半～2000年代前半生まれ：生物学な性別は、ほぼ半数ずつの割合）のコメントペーパーを回収してきたが、その具体的な総数は、7年間で、約1,000名に達している。コメントペーパーには、過去の完食指導について、その経験を記述するものが一定数存在する。以下、過去のコメントペーパーから当事者の語りを一部抜粋して紹介したい（以下、原文ママ）。

【1】自分の担任は野球部の副顧問だった……〔略〕……もし食べなかったら、副顧問の口か、顧問に言われて〔他の部員から——筆者註〕「給食を残すような奴に練習に来る資格はない」と言われたこともありました。……〔略〕……僕からしたら、楽しい給食というよりは拷問に近いレベ

ルだったかもしれません。（2018年9月21日）

【2】小・中と残飯0キャンペーンみたいなのがあって1番残食が少なかったクラスが賞状をもらえるというものだったのですが、残しちゃいけないというプレッシャーがすごくて嫌でした。私が小学生の時は昼休みに後ろの席で食べさせられたりすることはあったのに今はダメなんだなー。（2018年9月21日）

【3】時間をかければ量も食べられるのですが、とても遅いので今でも人と食事をするのが得意ではありません。給食がおいしくない、食べたくないとかいうわけではないのですが、学校の給食の時間が一番苦痛でした。（2019年9月20日）

【4】〔小学校の完食を強いられる指導で——筆者註〕牛乳に限らず、水分大半に恐怖感（？）みたいなものを覚えるようになった。吐き癖がついて、よく口内で戻し、戻しては押込みを繰り返していた。……〔略〕……今ではお茶などであれば普通にのめるようになった。でも、水と牛乳っぽい舌触りのもの（もちろん牛乳）は今でも飲みにくい。（2019年9月20日）

【5】私の中学では、残飯の量を減らすという取り組みとして、クラスごとに残飯の量をはかり順位をつけていました。その順位を昼の時間に放送し、減らしていましたが、食べれる子がたくさん食べてただけで本当に良い取り組みだったのだろうか疑問に思いました。体調が悪く小1の頃に給食が食べられなくて、下校時刻になっても食べ終わるまで帰らせてもらえないことがありました。しばらくの間は“給食”というものが恐怖で仕方ありませんでした。（2019年9月20日）

【6】私が小学校1年生だった時の話です。その日の給食ではパエリアが出て、そのパエリアの中には色々な種類の貝類が入っていました。私はそれまで特に貝類が苦手だったわけではなかったのですが、なぜだかその日は貝類が食べられませんでした。当時の担任の先生は、姉が小学校1年生だった時の担任の先生でもあり、母からも姉からも「怖い先生だから運がなかったね。」と言われていました。それ故に、「きちんと食べきらなく

ちゃ怒られちゃう。どうしよう。どうしよう。」と凄く内心で動揺していたのを覚えています。結局、給食の時間内に食べることが出来ず、お掃除の時間まで教室の隅でめそめそ1人寂しくパエリアをもぐもぐしていました。担任の先生から言われて、食べきれなかった給食をお掃除の時間まで食べさせられている（言い方が変かもしれませんが…）子は頻繁にいました。あれって自分が当事者でなければ、「頑張れ頑張れ！もうちょっと！あと少しで食べきれるじゃん！」なんて気持ちで応援できるのですが、自分が給食を食べさせられている当事者になると、もの凄く恥ずかしいんです。この話を書いている今も恥ずかしさで死にそうです（笑）この出来事が無意識にトラウマになっているのか、10年以上経った今でも私は貝類を食べられません。加えて、今のようふとした瞬間に当時を思い出して、羞恥で死にそうになります。言い回しが壮大かもしれませんが、児童のその後の味覚や人生をも左右してしまうなんて、給食における食育がどれくらい児童の重要な部分を占めていることがわかりますね。（2020年10月8日）

【7】私は小さい頃、好き嫌いが多かったです。幼稚園・小学校の給食時は、よく先生に無理やり食べさせられていました。例えば、幼稚園の頃は給食の後プールに入っていました、私は嫌いなものを食べることも残すこともできず、給食を食べ終わることができず、いつもプールに入れませんでした。5歳くらいの出来事ですが、鮮明に覚えています。また、小学校の給食でも同じでした。給食が食べ終わると、お昼休み、そしてそのあと掃除と時間割的にはなっていましたが、私は掃除の時間までいつも給食を食べていました。掃除の時間が過ぎ、5時間目が始まる前にやっと先生に食器を片付けなさいと許可をもらい、残していたのを覚えています。私は、このようなやり方に全く納得できません。まずは、まだ10歳にも満たない子供によくこれだけのことができるな。と思うのが率直な感想です。私は21歳になりましたが、これらの経験は忘れられず、また先生のこと鮮明に覚えています。そして、納得できない理由は、21歳になった私は、好き嫌いが全くないためです。あれだけ強制的に食べさせられても食べられなかったものが自然と食べれるようになっていきました。（2020年10月8日）

【8】思い出したのは小学生の頃クラスにいたトマトが苦手な女の子のことでした。ミニトマトが給食で出されたある日、彼女は残そうとしたのですが当時の担任がそれを許さず、5時間目が始まって机の上には給食のお皿が乗ったままでした。更に担任は「あなたがそれを食べるまで授業は始めません、皆の帰る時間も遅くなります、皆に迷惑をかけてるのよ？」と意地悪なことを言っていて、彼女を追い詰めていました。そして5時間目が終わる頃に大号泣しながらやっとの思いで食べる彼女。それを見つめる担任とクラスの人たち。私が小学3年生の頃の出来事ですが、あまりに衝撃的過ぎたので今でも忘れられません。10歳にも満たなかった私ですら、そのとき「この担任は異常だ」と感じました。（2020年10月8日）

【9】私は小学校時代に給食が食べることが出来なくて、午後の授業が始まる前まで残されることが日常でした。無理やり食べさせられたこともあり、給食がストレスになり、お昼になると保健室に行って食べないように抵抗していました。「根性で食べれる」と何度も言われたことを思い出しました。その時の担任の先生は新任の先生だったので、食べさせなければいけないと思っていたのかもしれませんが、小さい頃の嫌な記憶はずっと残り続けると感じました。しかし、私は未だに人と食事をするのが難しいです。一時期は家族とご飯を食べることが出来なくなりました。今は少しだけコントロールが出来るようになりました。（2021年9月30日）

【10】私が小学4年生の時、無理矢理担任に給食を食べさせられる児童がやはりいたのを覚えています。その子は一人だけ昼休みや掃除の時間まで泣きながら食べさせられていて、見るに堪えない様子でした。もちろん現代そんなことをしたら大問題になるのは当たり前になっていますし、少し前の時代のことだったとは思いますが、食べ物の好き嫌いや食べられる量については、一人ひとり異なることについては当たり前なのに、なんの意味があって他人がそれを矯正しようとするのか私にはわかりませんでした。（2021年9月30日）

【11】小学校生の時の担任の先生は残すことに厳しく食べきるまで残され、半泣きになりながら給

食を食べた。2つ目はグループで食事を摂ることが苦手だったからだ。仲の良い人が必ずしも給食の班にいるとはかぎらないため、どのように皆の話しに入ろうか考え、給食を味わって食べることが難しかった。（2022年9月21日）

【12】昔から好き嫌いが激しかった私は給食がものすごく嫌いでした。食べられない物を無理して口に入れる苦痛と、残した罪悪感とがあり正直、給食の時間が嫌いでした。私自身も残すことに抵抗があったため、友達にこっそりあげたりとしていましたが教師に見つかり怒られることも多かったです。残しても怒られるし、友達にあげても怒られるし、もう、食べるしかないのかと毎食半泣きで食べていた記憶があります。自分がわがままだと、分かってはいるし、世界を見渡すと食で困まっている人もいるとも分かっています。（2022年9月23日）

【13】幼稚園、小学校、中学校と、給食だったが、本当にどうしても野菜が食べられなかった。……〔略〕……「紛争地では食べられない子供もいるんだよ？」など説得されて、食べても、どうしても吐いてしまって食べられなかったから、本当に憂鬱で気分が悪かった。また、小学校2年生の給食の時間食べ切れないと昼休みに遊びに行けないという制度があった。皆が校庭に遊びに行く中、先生ににらまれながら、吐きそうになりながら、泣いて食べていたことを思い出した。（2023年9月22日）

【14】小学校3、4年生の時の担任の先生は給食を完食しなければいけなかった。私は元々食が細く全て半分にして食べていたが、全て食べなければいけないというプレッシャーで数口でおなかがいっぱいになってしまった。給食の時間が嫌すぎて学校に行けない時期があった。私の地域では白米はアルミのパックに入っていたが、途中から盛りつけする方式に変わった。盛りつける方式が変わってから、上の方のごはんがもらえるとカサカサで、下の方のごはんがもらえると水ぼくて私は食べられなかった。そのような状況の子が同じクラスで4人ぐらいいました。（2024年9月20日）

【15】私が通っていた中学校でも食べ残しが、問

題になっていました。毎週各クラスの残飯量を調べ、多いクラスから給食の量を減らしていく、というルールができたくらいです。私のクラスが残飯量1位になってしまったときは、とても辛かったです。なぜなら私は残す側の人間だったからです。その日から、おかわりをするのは歓迎されたけれど、減らしに行こうと、冷ややかな目で見られました。それは、食べろと強制されているようなものでした。人目を気にして食べ続けた結果、体調を崩しました。残さず給食を食べていたのに、です。（2024年9月20日）

【16】自分は、牛乳がとても嫌いで、牛乳飲むのに給食の時間から6時間目の終わりまで（時には放課後まで）かかっていました。学校のルールで全て食べ終わるまで（牛乳含む）デザートを食べられなかったので5年間（6年生の時のみ、先生が諦め、牛乳を飲まなくていいと言われデザートを食べれました）デザートなし、昼休みに友達と遊ぶ時間も奪われました。これに関しては、今でもどうなんだろうか？と思いながら生活しています。（2024年9月20日）

【17】小学校低学年のときに給食を食べられなくなったことがあった。ご飯が、おいしくなかった訳ではなかったし、食が細いということもなかったが、お昼休みの時間までに食べきらないといけないという状況にプレッシャーがかかり、全く食べれなくなってしまった。特に私の学校では『鈴木先生』の学校のように班ごとに向かい合わせになって食べていたことに加えて、お昼休みまでに食べられなかった子が班にいたら上の全員の子がお昼休みにいけないというルールもあり、給食の時間が苦痛でしかなかったことを思い出した。そして、席が一緒になった子とどうしても交流が増えるため、班決めのときから私とは一緒に給食を食べたら昼休みに遊べなくなると皆から避けられ、どんどん給食が食べられなくなっていった。（2024年9月25日）

【18】自身も小学一年生の頃に教師に苦手なものを無理やり食べさせられ食べることができないと言えは恐喝されました。その後泣きながら5時間目の授業の時間に、一人水場で食べきるまで授業に参加できず、まだ入学したての子供の私には苦

痛でしかありませんでした。(それ以降毎日献立を調べて苦手なものが出る前日は怖くて眠れないほどトラウマになりました。確かに、好き嫌いの無い人からすれば食べないのは甘え、少しくらいなら食べれるだろうと思う事も強く理解しています。しかし、そういった思想の押しつけで、自身は今でもその食材と給食に嫌悪感を持って生きています。(2024年9月25日)

紙幅の都合で全文を紹介することはできないが、これ以外にも同様の経験を書き綴ったコメントペーパーは膨大な数になる。完食指導に関する新聞報道の存在も踏まえると、彼らの記述した内容は、ある程度、同世代の若年層のなかでも共有されうる経験と思われる。

また、コメントペーパーからは、類似する完食指導のエピソードを読み取ることができる。それは、完食指導によって「半泣き」(11・12)になったり、「プレッシャー」(2・14・17)や「苦痛」(3・12・17・18)に苛まれて、給食の時間を過ごしていたというものである。ただし、完食指導が児童生徒の苦手な食べ物をも取り残さないことを目的としている以上、児童生徒がこうした負担感を抱くのは、当然の帰結ではある。

なお、コメントペーパーのなかでは、特に【16】が極端な経験を語っている。執筆者の学生は、小学校の徹底した完食指導のため、1～5年生の間、昼休みに友人と遊ぶことができなかったようである。残食を出さないためには、それだけ厳重な指導が必要なのだろうか。

3. 2010年代における給食問題

3-1. 完食指導へのまなざし

だが、2020年代に進み、完食指導については否定的な評価が高まっている。その背景には、近年、保育施設や学校において、「完食の強要や、給食を無理やり口に入れるなどの不適切な指導が相次いで発覚した」という社会的背景がある(『朝日新聞』2024年11月20日付)。ただ、今後、学校教育現場において、完食指導に対する意識が問い直されるかどうかは、わからない。

直近でいうと、給食については、2010年代にも残食や提供方法について盛んに報道がなされたことがある。当時は、給食の新規導入を開始した自治体において、その品質に問題があり、残食も多いとい

うことが争点となっていた。その延長上に、完食指導など給食に関するトラブルが報道されることになる。ただ、その頃の報道内容をみると、完食指導については、曖昧な評価に終始しているものも少なくなかった。

たとえば、岐阜県の公立小学校において、完食指導のために複数の児童が嘔吐した事案について紹介してみよう。この事案では、女性教諭が2016(平成28)年度に「1年生のクラスで給食を残さないよう指導」するなかで、「偏食の多い児童にはスプーンで口元に運ぶなど」したが、「4人の児童が吐き、うち2人は3回前後もどした」(『日本経済新聞』2017年9月26日付)。翌年度も、女性教諭は「補助で入った2年生のクラスでも完食するよう指導」し、「1人がもどした」という(『日本経済新聞』2017年9月26日付)。嘔吐が繰り返されているので、明らかに不適切な指導だが、同時代のメディア報道では、その評価を必ずしも問題だと断言していない。当時のニュース番組のナレーションを以下に紹介しよう。

50代の女性教諭は「アンチ「好き嫌い」……[略]……保護者から「偏食をなくすよう指導をして欲しい」との依頼があったケースもあったという。そこで女性教員は本人が嫌いなものを通常の半分に減らしたうえで「これくらいなら食べられるでしょ」などと声をかけながら食べさせた。無理に口に押し込んだりはしていないという。だがその結果、吐き出した。嫌いな食べ物を食べるように指導することは、果たして教育なのか、それとも人権侵害なのか。(テレビ朝日『スーパーJチャンネル』2017年9月26日放送)

報道では、完食指導の評価を「教育」と「人権侵害」という両論併記の記載で終えている。この事案では、教員に「好き嫌いがないように励ます気持ち」(『日本経済新聞』2017年9月26日付)があり、「嫌いなものから逃げないでほしい、達成感を感じてほしいという思いで指導した」(テレビ朝日『スーパーJチャンネル』2017年9月26日放送)との記録が残っている。一見、意図そのものは否定しがたいように見える。そのため、ナレーションは、どちらの立場にも傾斜しないような構成にならざるを得なかったのだろうか。

次に、別のニュース番組で紹介された大阪市教育

委員会での給食に関する議論の様子を紹介する。以下は、当時の大阪市長と中学校の教員との会話である。このころ、大阪市では新たに導入された中学校給食について、その味が「まずい」という批判が殺到していた。

男性教諭：残食が多いというのが正直なところですよ。

橋下徹：僕は実際食べてですね、別にまずいとも思わなかったし、今は、あれなんですかね。食べ終わるまでずっと食べられるとかだめなんですか？僕が小学校の時には席後ろにさせられて食べ終わるまで、食べさせられていましたよ。

男性教諭：保護者からすぐにクレームが来ますね。

橋下徹：クレームになるんですか？

男性教諭：「なんでそんな遅くまでね、無理やり食べさせるんだ」って。

橋下徹：僕らのころは、そりゃ、親が感謝してましたけどね。「よく食べさせてくれました」って。

男性教諭：今は、逆に、そういうのは支障が多いですね。（フジテレビ『とくダネ！』2014年12月18日放送）

このやり取りは興味深い。教員は完食指導を徹底できない理由を保護者から「クレーム」と返している。完食指導がなぜ問題となるのかという論点について、正面から応答していない。では、「クレーム」がなければ、完食指導は継続すべきものなのだろうか。問題はクレームの有無なのだろうか。

3-2. 完食指導と学校給食業務の民間委託

給食に関する過去の報道の事例を紹介したが、ここからは、いくつかの教訓を得ることができる。

第一に、女性教諭が語るように、完食指導の意図が児童生徒の「好き嫌い」を解消させ、「嫌いなものから逃げない」姿勢を育てようとするものだとすると、その意図そのものは否定しがたい。だからこそ、完食指導を否定することで、指導を肯定する論者からは、「食べ物を粗末にするのか」、「嫌いなものから逃げるのか」といった極論を提示される可能性がある。

第二に、岐阜県と大阪市の事例に共通するが、残食が出る原因は、明らかに、児童生徒の側の「好き嫌い」や「わがまま」という理由に回収されている。そこで、教育関係者は、給食のメニューを「通常の半分」の量にしたり、時間を延長して「食べ終わる

まで」「食べさせる」措置を模索している。

第三に、2017（平成29）年には、子どもの嘔吐という完食指導の弊害が発生し、かつ、それが広範に報道されながらも、2020年代に再度同様の事案が発生している。このことは、日本の学校教育現場は、完食指導による問題が起きて、総体的に、それを正面から受け止めることができず、給食のあり方を問い直すまでには到らなかったということを示唆する。

第三の論点は、おそらく、第一と第二の論点によって支えられている。完食指導の問題性は、2017年以前にも繰り返し報道されていたが⁽⁵⁾、前述のように、現在も、その手の指導方針は消えてはいない。これは、第一の論点にあるように、完食指導が食べ物に対する善良な価値観を屋台骨にしていることと、第二の論点にあるように、残食が児童生徒の問題とされていることに起因すると考えられる。とりわけ、“指導”概念は、児童生徒の資質の不足を土台とする教育的措置なので、完食指導は、端的に、〈食べられない子どもに課題がある〉という構図を前提とするはずである。したがって、第二の論点のもつ威力は大きいように思われる。

ただ、これらの論点は詭弁にすぎない。厳密にいうと、残食と食べ物を粗末にすることは、等質の議論ではない。苦手な野菜をひとかけら皿の隅に取り残すことと、料理に一口も手をつけずに廃棄することは、同等ではない。後者のように極端な偏食等の事例は、その都度対応すべきもので、残食が一律に悪とされ、指導の対象になるのは、一面的な評価である。また、残食の程度も問題だろう。体調によって珍しく完食ができなかったという場合と、継続的な残食は等質の事例とはいえない。この場合も結論は同じである。

なお、そもそも、給食の品質に問題がある場合、完食を強いるよりも、給食そのものを改善するほうが先決である。2010年代の報道には、次のような指摘がある。

中学校教諭：今日のお昼も子どもたちとみんなで食べたんですけど、やっぱり今日の麻婆豆腐なんか、とても自分も食べたいとあまり思わなかったです。（フジテレビ『とくダネ！』2014年12月18日放送）

大人は食が進まないが、児童生徒であれば給食は完食できるというのは、ロジックとして破綻している。特に、2000年代に入り、学校給食業務の民間委託が進んでいる。食材の購入や運搬、給食室や給食センターでの調理などの諸業務が民間業者に委託され、いわゆる「デリバリー方式」と呼ばれる給食の提供方式も普及した。全国の公立小学校・中学校全体のうち、給食を実施している学校の委託率は、2017～2018年度に約50%に到達し、その後も増加傾向にある⁽⁶⁾。

ただ、委託時の選定に際しては、競争入札が行われるなどして、相対的に安価な予算で運営可能な民間業者が評価されやすい。その結果、価格相当の給食、すなわち、低品質の給食が提供されることもあるが、それが「美味しくない」(＝完食できない)という児童生徒の評価につながる傾向は否定できない。

2010年代の別の報道の事例をみてみよう。次の引用は、あるニュース番組のナレーションである。神奈川県大磯町では、2016年1月から町内の公立中学校にて民間業者に委託して給食を提供していた。ニュース番組は、この給食の問題を報道するものである。

給食に異物が混入していたことが発覚したのは、神奈川県大磯町の2つの中学校。プラスチックの破片や虫、さらには金属片など、去年1月から今年の7月まで、84件の異物混入が相次いでいた。……〔略〕……そもそも、大磯町中学校では、給食を大量に残す生徒が続出する問題が起きていた。……〔略〕……全国平均のおよそ4倍。見た目が悪い、味付けが薄いなどの理由で半分以上が食べ残される日もある。……〔略〕……相模原市でも異物混入が判明。給食は大磯町と同じ工場で調理され、13の中学校に提供されていた。(テレビ朝日『スーパーJチャンネル』2017年9月20日放送)

この大磯町と相模原市の事案は大々的に報道された。Wikipediaにも、該当事案の解説記事が残っている⁽⁷⁾。ただ、当時から、実際に給食を食べた中学生への詳細な聞き取り記録などは公開されていないので、当事者による給食や事案への評価は不明瞭であった。そこで、筆者は、上記報道で紹介された相模原市の公立中学校の卒業生の女性(＝調査時は東京都内の私立大学2年生)を探し、2022年10月12

日に、当時のできごとについて、東京都内の私立大学のキャンパスにおいてインタビュー調査(半構造化インタビュー)を実施した。以下に、筆者と調査協力者のやり取りを掲示する。彼女は中学校2～3年生時に報道された民間業者の給食を食べていた。

香川：給食は最初からおいしくなかったんですか。

女性：最初からおいしくなかったですね。見栄えも悪かったし。あと、冷蔵庫の香り……。機械の香りがしたり。……あとは、何て言うんだろう、全体的に薄味なんですね。薄味とはいえ、出汁とか、「うま味」がちゃんと出るものとかを使っていれば気にならなかったと思うんですけど。コクというか、うま味がなくて。本当に。さっぱりした味だったから、ちょっと違うなみたいな感じに思いましたね。

香川：臭いね、確かに。トレーとかに臭いが移るとか、たまにあるじゃないですか。やっぱり、そういう感じですか。

女性：そう、何なんでしょうね。でも、ご飯とかもラップしないでそのまま冷蔵庫に入れておくと、冷蔵庫の香りがつきませんか。

香川：はい、はい。

女性：本当にそんな感じなんですよ。「わー、冷蔵庫」みたいな。でも、ご飯はあったかくて、炊きたてだと思うので、ご飯はおいしかったんですけど、やっぱり、そういう……。

香川：おかずが……。

女性：そう、おかず、副菜系があんまりでしたね。

ただし、彼女は、それでも給食を食べ残すことに抵抗感があり、残菜を出さないようにしていたと語った。

香川：結構残していたということですね。あ、食べてたんですか？

女性：頑張って食べてました。

香川：偉いですね。ほぼ残さず？

女性：そうです。ほぼ残さず食べてました。でも、ほんとに無理なときは、「ごめんなさい」と言いながら、〔トレーの〕ふた閉めて、ずっと〔返却場所に〕返して。

香川：すごいですね。それはあなたのあれなんですか、ポリシーというか、お育ち？

女性：いや、ポリシー。

香川：「やっぱり、残してはいかん」みたいな？
女性：「残してはいかん」みたい。……私、嫌いなものほんとにほとんどないんですよ。

香川：すごいですね。

女性：そう、だから、雑食。基本的には何でも食べれるんですけど、でも、私が残すということは、相当なこと。自分で言うのは何ですけど。お魚のとき、青臭さとかで〔給食を〕残してましたね。

卒業生は、もともと食べ物の「好き嫌い」がなかったほうだが、それでもなお完食が難しいというエピソードを語った。完食指導の議論では、その前提として、児童生徒の偏食や「好き嫌い」が前景化しがちである。しかし、大阪府の教員の語りや、ここで紹介した卒業生の語りを踏まえると、児童生徒に残食の責任を帰す完食指導の構造には、やはり問題があるといえるのではないだろうか。

4. テレビドラマの映像分析と給食

それでは、児童生徒に残食の責任を負わず、完食指導の枠組みを超えて給食を理解するためには、どうすればいいのだろう。その参考のため、最後に、給食に関する、ひとつの映像資料を紹介する。本稿で取り上げる作品は、テレビドラマ『鈴木先生』（テレビ東京、2011）である。当該作品は、公立中学校2年生の学級担任である男性教諭「鈴木先生」の教育実践と生徒の成長の様子を描いたフィクショナルな映像資料である。本稿では、全10話のうち、給食に関する第2話（2011年5月2日放送）の一場面を分析する。本稿において、この映像資料を取り上げる理由は、当該作品が給食のあり方を仔細に描いた稀有な作品だからである。

内容の分析に進む前に、今回取り上げる第2話の概要を説明しよう。①ある日、給食のメニューのひとつである酢豚が残食の多さから廃止予定となる。②それに対して、一部の生徒から酢豚存続の訴えが出され、教諭たちが残食の実態を把握するためにアンケート調査を実施する。③アンケート調査の結果をもとに、職員会議にて酢豚存続の可否について教師が議論する。④職員会議の結果として、酢豚が廃止されるに到る。

以下に掲示するトランスクリプトは、アンケート調査終了後の職員会議の議論の様子である（アンケート項目末尾の「（）」内は集計結果を示す）。ア

ンケートでは、「好き」（46名）、「普通」（135名）、「好きではないが食べられる」（97名）、「どうしても食べられない」（37名）という項目が立てられた。集計結果に対する教師の反応は、次の通りである。

男性教諭（山崎）：全校生徒数315人中、「どうしても食べられない」という子が37人という結果になりました。

男性教諭（石垣）：1クラス4人強ですか。

女性教諭（五井）：案外、数字で見ると少ないものですね。

女性教諭（楨谷）：食べれば食べられる子が食べてなかったってことですよね。

男性教諭（江本）これは生徒の実情を気づかずに廃止するところでしたな。

このように、職員会議では、「どうしても食べられない」生徒が少ないという認識が共有され、全体の雰囲気は酢豚存続に傾いていく。ところが、これに対して、ある女性教諭は、以下のように発言した。彼女の意見に対しては、校長も同意している。

女性教諭（足子）：クラスに4人って本当に少ないですか？ ……〔略〕 …… 酢豚はメインメニューです。つけあわせのひとつじゃないんです。そのメインメニューを、まったく食べられないまま、5・6時限目の授業を受けなければならない生徒がクラスに4人。これは少ないですか？ 言い換えれば、その4人を犠牲にしてまで酢豚は食べさせなければならないものなのでしょうか？

校長：私も、そのあたりは気になっていました。酢豚が好きな子にとっては、それが消えることはとても悲しいことでしょう。しかし、酢豚の代わりに献立が……たとえば、ハンバーグのような人気メニューなら、その子たちだっておいしく食べられて、みなが幸せになる。

男性教諭（江本）：いやあ、校長先生、それは違うと思うなあ。ねえ、鈴木先生。

男性教諭（鈴木）：僕も……校長先生のおっしゃるような対処しか、今の我々には、それしかない」と痛感しています。

この女性教諭と校長のやり取りは興味深い。先にもみたように、残食が出ると、それは、児童生徒に

責任される傾向がある。しかし、女性教諭は、そもそも、㉔4名を「犠牲にして」不人気のメニューを提供し続けることに疑義を示している。そのうえで、彼女は、㉕給食の意図を栄養摂取として理解し、給食という教育システムにそれ以外の意図（＝完食指導によって学級の団結力を高める、苦手意識を克服する等々）を持ち込んではいない。この女性教諭は、アンケート実施以前の職員会議でも、次のように発言していた。

女性教諭（足子）：個人的には、残飯の量よりも、食べていない生徒の数のほうが重大だと思います。酢豚ってメインメニューでしょ？ 食べられない子は、その日、パンとかデザートとかの栄養しか取れないってことですから。

また、校長は、㉖ハンバーグという新たなメニューを提案することで、酢豚が「好き」という生徒から「どうしても食べられない」（37名）という生徒までを包摂しようとしている。㉗の見解については、「きりがない」という意見も寄せられるかもしれないが⁽⁸⁾、それは表面的な評価である。〈よりよい〉、〈よりまし〉な選択肢を提示して、二項対立のニーズ（＝この場合は、酢豚を食べられる・食べられない）を解消しようとする方途は、社会政策においても重要な視点となるだろう。もっとも、ハンバーグの場合でも「どうしても食べられない」という生徒が出る可能性はある。ただ、その数が現状の4名以下になれば、それは政策の成果であり、一応、議論は次のステージに進んだことになる。

ただ、男性教諭（江本）は、この見解について、以下のように疑問を呈している。しかし、結果的に、その疑問には鈴木から反駁が寄せられることになった。

男性教諭（江本）：酢豚が消えれば、事は有耶無耶になって終わりだよ。なんとか、われわれで、みんなが美味しく食べられるよう、何らかの指導をすることが……。

男性教諭（鈴木）：「なんらかの指導」って、何です？

男性教諭（江本）：……。

男性教諭（鈴木）：そんな指導は、できないでしょう。それは結局、好き嫌いをなおせないのに酢豚廃止反対に手を挙げる生徒と似てしまいはしませんか。

本稿の立場としては、このやり取りも重要となる。江本は、酢豚を安易に廃止せずに、「なんらかの指導」をもって残食を減らそうと主張する。それは、完食指導の文脈のみならず、通俗的な給食指導のなかでも支持される立場だろう。だが、それについて、鈴木は、「なんらかの指導」の方途を訊ねている。ただ、江本からの具体的な提案はなされなかった。

そもそも、人間の味覚や食べ物の「好き嫌い」は、成育歴とも関係が深く、他者の指導で安易に改善されるものではないだろう⁽⁹⁾。それを改善する指導なども特段一般化されてはいない。戦後、学校給食法が施行されてから70年以上が経っているが、残食を減らす方途として市井に普及しているのは、給食時間の延長や緩急つけた完食指導の徹底か、せいぜい、「ひと口だけ食べる」という支援である⁽¹⁰⁾。もっとも、「ひと口だけ」という働きかけは、保育施設のように保育者が幼児の食事にかかりきりになることができれば実現可能かもしれない。ただ、給食時間中、数十人の児童生徒の様子を、ほぼ単独で巡視しなければならない小中学校の担任教師には、そうした個別対応は難しいはずである。

それでもなお、自分自身の被教育体験（＝家庭教育ほか）や個人の感性による好悪から、「食べ物を残してはいけない」と考える人々も多いだろうが、そもそも、完食指導は味覚の程度や「好き嫌い」を変容させるというよりも、残食を出さないことに比重を置く指導であるから、児童生徒の「好み」を根本的に操作する方途でもない。鈴木が「そんな指導は、できない」と断言するのは、こうした事情が存在するからだろう。

なお、江本は、アンケート調査を実施する以前の職員会議では、次のように語っていた。

男性教諭（江本）：廃止した方がいいかどうかを挙手させる。そういう聞きかたをしたらみんな廃止案内に手を挙げるでしょうね。

女性教諭（楨谷）：なぜですか？

男性教諭（江本）：廃止になる酢豚が可哀想。そういうムードに生徒は弱いからです。僕たちもなんとか酢豚が食べられるよう努力します。そんなこと言うんだよ、そんなときだけは。だが実際はやっぱり食べたくないものは食べたくない食べられない。

このように、以前の会議で、江本は、生徒の「食べられない」という現状を認め、「好き嫌い」変容の不可能性に一定の理解を示していた。そのうえで、彼は、酢豚廃止について、生徒が「ムード」に流れることのないように注意を促している。しかし、その江本でさえ、女性教諭や校長のやり取りを受けて、「なんらかの指導」という、具体性のない対案を持ち出すに到ったのである。このような彼の主張の変遷は、生徒の「好き嫌い」変容の不可能性は理解できるものの、生徒に対して、「食べなくてもよい」という選択肢を示す段階になると、つい、「なんらかの指導」を模索したくなるという教育関係者の心情の機微を示しているものとして評価できる。そして、この心情の機微こそ、教育関係者の給食の残食に対する理解にも相通じるものであり、かつ、幾度かのメディアからの批判を受けつつ、「なんらかの指導」として、学校教育現場において完食指導が選択され続けた理由のひとつとも考えられる⁽¹¹⁾。

5. 総合考察

本稿では完食指導を手がかりに、給食のあり方について議論を進めてきた。

本論で確認したように、①完食指導は、「好き嫌いをしない」、「嫌いなものから逃げない」といった、それ自体は善良な価値観を前提としていること、②残食の原因が児童生徒の「好き嫌い」や「わがまま」という理由に回収されることから、その意図そのものは否定しがたい構造をもっていた。ただ、①については、残食の分量や頻度を抜きに、一律に完食を志向することは乱暴であるし、そもそも、給食の目的は、「嫌いなものから逃げない」姿勢を育成するためのものではない。また、②についても、給食の品質の問題を抜きに完食や残食の議論を行うこともできないだろう。

本稿では、①②の論点を見直すために、テレビドラマ『鈴木先生』を分析対象に考究した。当該の映像資料で、女性教諭は、特定のメニューを「どうしても食べられない」少数の生徒を「犠牲にして」全生徒にそれを提供し続ける必要があるのかという問題提起を行った。それに対して、校長は、残食を減らすための指導には頼らず、〈よりましな〉選択肢として、メニューそのものの変更を提案した。このさいに、「なんらかの指導」をもって、残食を減らす努力ができないかと主張する男性教諭もいた。だが、それに対して、主人公の鈴木は、その指導の不

可能性を説いて会議は終わっている。

上記のやり取りからは、次のような論点が読み取れる。④給食の目的は、生徒の栄養摂取である（＝女性教諭・校長・鈴木の理解）。⑤特定のメニューを「どうしても食べられない」生徒に対しては、その生徒の現状を好転させつつ、他の生徒の給食の質を維持、あるいは、向上させる政策が重要となる（＝校長の理解）。⑥この政策は、「どうしても食べられない」生徒の資質を問題視するのではなく、彼ら（＝マイノリティ）の立場を考慮することで生まれえたものである。給食本来の役割である④に立ち返って、そこから全員を包摂する政策を構想した結果、⑤⑥に到ったわけである。全員が均等に栄養摂取をはかるといふ、いうなれば、「シンプルな人間の「普遍性」」を想定する給食は、食べ物の志向性という個々人の「多様性」に出会うと一瞬で」話が「複雑になる」（キム＝尹、2021 p.187）。その複雑さの前で、人々は、「どうせ全員を満足させることは不可能だ」と（キム＝尹、2021 p.187）考えがちだろう。

ただ、「普遍性と多様性の両方を満たすための代案」（キム＝尹 2021 p.190）を模索することで、マイノリティとマジョリティの双方を包摂する普遍性が獲得できる。たとえば、車椅子の使用をサポートするために設置されたエレベーターは、ベビーカーやキャリーケースの使用、高齢者や体力の乏しい人々らの助けにもなる。また、性的マイノリティを想定して増設された「だれでもトイレ」は、非当事者や子ども連れの家族らにも利用されている。「人気メニュー」に改めれば、酢豚が「どうしても食べられない」生徒も非当事者も、「みなが幸せになる」という見解は、まさに、こうした文脈に沿った提案であったと評価することができるだろう。とはいえ、現実には、教育関係者から、このような発想の解決策が提案されることは稀である。本稿の知見についても、教育関係者からは、すべてが机上の空論であるとの評価がなされる可能性が高い。

ただ、改めて確認をしておきたいのだが、現実問題として、一律に完食を強制することは不可能である。本論では触れなかったが、諸体質、アレルギー⁽¹²⁾、宗教上の禁忌など、多様な理由で特定の食べ物を「どうしても食べられない」児童生徒は一定数存在する。もちろん、アレルギーや宗教上の禁忌であれば、現在でも完食指導の対象とはなりにくい。しかし、食べ物の志向性は、諸体質、家庭での育ち（藤田、2024）、思想信条などからつくられる。

会食恐怖症で共食が困難な児童生徒に対して、それでも教師は完食指導を貫徹できるのだろうか。ビーガンの家庭で育った児童生徒が肉類に手をつけなかったとき、教師はなお完食指導を貫徹できるのだろうか⁽¹³⁾。

2020年代現在においても、いまだに、給食で「出されたもの」は一律に「食べるのが筋だ」(『朝日新聞』2025年9月24日付)という趣旨の極論が市民から展開されることがある。こうした見解は、信教や文化の多様性のみならず、諸体質、家庭での育ち、個々人の思想信条(=すなわち、“人間の多様性”)をも無視するものだろう。また、このような見解は、完食指導を支える文化的土壌のひとつかもしれない。完食幻想を降り、個に即した共食のあり方を模索することで、給食の場は公共的空間に近づく。その実現のために、教育関係者は、給食の場における多様性を具現化する方途を、教育科学としても教育実践としても探究しなければならない。

【謝辞】

本稿は、2018～2024年まで、日本大学法学部で開講されていた「教育学Ⅱ」第2回の授業内容をリライトしたものです。毎回の授業において、つねに的確なコメントを寄せていただいた受講者の方々に心からの感謝とお礼を申し上げます。また、本稿執筆に際して、日本大学大学院のS氏(2019年度受講)、A氏(2020年度受講)には、当時の配布資料をご提供いただきました。本当にどうもありがとうございました。

【倫理的配慮】

本稿のインタビューデータやコメントペーパーは、調査協力者の許諾を得て使用している。また、「日本社会学会倫理綱領」を遵守して研究調査活動を行った。

1 競争や序列化については、次の新聞報道に記録がある。「100回連続で給食完食、力合わせ達成」『読売新聞』(鹿児島西部版：2006年2月22日付)、「クラスの完食記録のため 調布、給食でアレルギー 死亡の女儿」『読売新聞』(全国版東京夕刊：2013年7月23日付)。また、懲罰的措置については、次の新聞記事に記録がある。「気流 学校給食での強制は逆効果」『読売

新聞』(全国版朝刊：1983年4月11日)、「給食ってなんだっけ 残すな、静かに食べろ、は嫌」『読売新聞』(全国版朝刊：1988年11月23日付)。「时时刻刻 給食、心の傷にしないため 完食しないと居残り、無理やり口に押しこむ」『朝日新聞』(全国版朝刊：2024年3月4日付)。

- 2 とはいえ、当時の教育関係者のなかには、「如何に栄養的に万善を尽くしても児童に歓迎されない食物は失敗である」という評価と、「嗜好一点張りでも偏食の矯正は出来ない」という葛藤がすでに普及していたようである(堀、1955 p.14)。
- 3 たとえば、保護者が主要な読者層として想定されていた教育雑誌『ひと』(太郎次郎社：1973-2000)誌上では、この時期に給食のあり方について疑問を表明する母親からの投稿が複数確認できる。具体的には、小学生の子どもの教室に給食の完食回数を示した「給食グラフ」があると報告する記事(新井、1976 p.89；曾根、1979 p.103)などがある。学校教育現場において、日常的に完食が競争の手段となっていたことがうかがえる。また、1980年代の新聞報道によると、「煮魚とニンジンが食べられ」ない小学生の女儿に対して、「教師はそれを残すことを許さず、連帯責任ということで、班員は彼女が食べ終わるまで教室から出られ」なかったこと(「気流 学校教育での強制は逆効果」『読売新聞』全国版朝刊：1983年4月11日付)。小学生の男児の体験談として、「1年生の時」「みんなが掃除していたのに」、教室の「後ろで食べさせられていた人も」おり、しかも、教師は「班の代表同士でジャンケンさせ」、「負けると、その班の人が」食缶に残った「みんなが嫌いな」ものを強制的に食べさせられた(「給食ってなんだっけ 残すな、静かに食べろ、は嫌」『読売新聞』全国版朝刊：1988年11月23日)といった記録がみられる。
- 4 「100回連続で給食完食、力合わせ達成」『読売新聞』(鹿児島西部版：2006年2月22日付)。「クラスの完食記録のため 調布、給食でアレルギー 死亡の女儿」『読売新聞』(全国版東京夕刊：2013年7月23日付)、「連載 全7回「完食指導」を考える 食べられない子どもたち」『朝日新聞』web版(2023年10月19日ー10月26日)など。
- 5 「気流 学校給食での強制は逆効果」『読売新聞』(全国版朝刊：1983年4月11日)、「給食って

- なんだって 残すな、静かに食べろ、は嫌』『讀賣新聞』（全国版朝刊：1988年11月23日付）。
- 6 「学校給食の外部委託率 18年度は4.6ポイントの大幅増、50%の大台に突入」『食品産業社 冷食日報』（2019年3月13日付）、『学校給食実施状況調査（令和5年5月1日現在）』（文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課）p.17に推移の詳細がある。
 - 7 「Wikipedia 大磯町における学校給食問題」（<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E7%A3%AF%E7%94%BA%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B5%A6%E9%A3%9F%E5%95%8F%E9%A1%8C>）（2025年11月18日閲覧）
 - 8 過去のコメントペーパーには、次のような見解があった。「酢豚が食べられない人を犠牲にしてまでいいとっていただけ、どの食べ物にだって食べられない人はいるはずなので、そこを気にしていたらキリがないのではと思った」（2023年9月22日）。「嫌いな人もいるからメニューを廃止する、なんて言ってしまったら、一つ一つのメニューに、そのメニューが嫌いな人って何人いるもんだからキリがないし、アンケートの意味を成してない」（2024年9月20日）。
 - 9 ヒトや動物が特定の食べ物を忌避するのは、それに対する嫌悪を学習した結果である。これを味覚嫌悪学習と呼ぶ。「味覚嫌悪習の記憶は非常に永く保持され」、嫌悪する食べ物を一度摂取できるようになったとしても、「期間をおくと、再び嫌悪するようになる」（＝自発的回復）（乾、2016 p.16）。このことから、「味覚嫌悪学習の消去というのは非常に限定的な現象」で、一度「嫌いになった食べ物を以前と全く同様に食べるのは難しいかもしれない」（乾、2016 p.16）との指摘さえある。
 - 10 これについては、次のような学生の見解もある。「中学校では先生によっては残飯0まで給食が終われないみたいなことがあって、アレルギーでもない限りは全員一口以上は食べなくてはいけなかったのが少し嫌だった。……[略]…… どうしても、だめな子が無理に食べさせられてたのはかわいそうだった。食わず嫌いとしているわけではないので1口食べたところで好きにはならないため、何のためにそういうことをするのかと思った」（2022年9月23日）。
- また、鶏や豚の屠殺や解体を通して、「いのち」についての教育実践を展開した小学校教師の鳥山敏子（1941-2013）は、次のような興味深いエピソードを語っている。鳥山が勤務していた公立小学校（東京都）において、熱心な栄養士が「有機農法の野菜やくだものを仕入れるなどの努力をし、親たちを啓発するために通信」を出すなどして、「給食は一変した」が、それでも「残飯はやはり」出る（鳥山、1985 p.39）。「いのち」について徹底した教育実践を展開した彼女ですら、残食ゼロの不可能性をこのように語っているのである。
- 11 なお、日本の場合、たいていの教育関係者は進学校や高等教育機関の出身である。総体的に、彼らの社会階層は、中間層か富裕層で、自身の成育環境では、偏食が批判され、残食を減らす努力が善良な価値観とされる傾向があったと推測される。そのため、教育関係者の身体に沁みついた感性は、一定程度の残食を許容する「食べなくてもよい」方針のまえに、「なんらかの指導」を模索したくなるのかもしれない。
 - 12 アレルギー当事者の米増（2024 p.16）は、アレルギー成分を含まない食品でも、過去に一度「強いアレルギー反応が」出たことで、それ以降、その食品にもアレルギーの類似反応が出るようになったと語っている。その意味では、血液検査や食物経口負荷試験で明確にアレルギーと判定されなくとも、特定の食材を摂取することで、悪心、嘔吐、下痢、頭痛、蕁麻疹といった諸症状をあらわす児童生徒らの存在も、給食において看過できない多様性の事例として位置づけることができるのではないだろうか。実のところ、完食指導の対象・対象外とされる境界の線引きは曖昧な部分もある。
 - 13 「危険物はヒトや動物に嫌悪の情動を喚起する性質を持つ」ことから、「食べ物に対する嫌悪は危険回避による生命維持という観点から極めて重要な役割がある」という（乾、2016 p.9）。このようにみえてくると、極端な偏食は別に考えるとしても、食べ物に対する嫌悪の感情は、むしろ、それを持ち合わせているほうが自然であると評価することができる。その意味で、嫌悪の感情もヒトとしての原始的な権利のひとつである。

【文献】（本文中で典拠が示されたものは省略した）

- 新井恵美子（1976）「給食競争に疑問あり」『ひと』第37号、太郎次郎社、p.89.
- 藤田結子（2024）「食をめぐる階層とジェンダーの交差」『家族社会学研究』第36巻第2号、日本家族社会学会、pp.181-190.
- 堀あい（1955）「栄養と衛生管理」『よこはま教育時報』第29号、横浜市教育委員会事務局、pp.14-15.
- 乾賢（2016）「食べ物を嫌いになる理由」『心理学ワールド』第74号、日本心理学会、pp.9-12.
- 岩原拓（1929）『学校看護法大意』右文館.
- キム・ジヘ〔翻訳：尹怡景〕（2019＝2021）『差別はたいてい悪意のない人がする』大月書店.（＝선량한 차별주의자）
- 曾根幸子（1979）「入学1年で知った教育のゆがみ」『ひと』第81号、太郎次郎社、pp.101-106.

- 鳥山敏子（1985）『いのちに触れる』太郎次郎社.
- 米増ゆり（2024）「証明がほしい」『Personal Writing』第7号、猫の手書房、pp.12-25.
- 「給食指導で児童5人嘔吐 岐阜の小学校、教諭を厳重注意」『日本経済新聞』（web版：2017年9月26日配信）.
- 「小学校時代の「完食指導」、会食恐怖症に大人になっても心に残る傷」『朝日新聞』（web版：2024年4月7日配信）.
- 「「完食指導」を考える 食べられない子どもたち 反響編：上）給食、引きずる苦い記憶」（『朝日新聞』web版：2024年11月20日配信）.
- 「「ムスリムの給食決定」、北九州市教委が否定 誤情報に抗議1千件超」『朝日新聞』（web版：2025年9月24日配信）.